



わかやま国際ネットワーク事業 南加(南カリフォルニア)県人会とのオンライン交流

アメリカと日本 太平洋を隔て離れていても 和歌山県人として心はひとつ



12月23日会議室にて、わかやま国際ネットワーク事業の一環として南加(南カリフォルニア)県人会とのオンライン交流が開催されました。**和歌山県は、海外移住者数が全国第6位(約33,000人)の移民県**であり、多くの県民が夢を抱いて海を渡った歴史があります。海外に渡った県民は、それぞれの移住先で「和歌山県人会」を設立し、和歌山とのつながりを現在まで保ち続けています。世界各地で活躍している「和歌山県人」との交流を通して、若い世代に移民の歴史を知っていただくとともに、異文化への理解を深め、世界を身近に感じてもらうことがこの事業の目的です。実は、**南加県人会と御坊市には深いつながり**があります。1964年の東京オリンピ

ック招致に尽力し、「東京にオリンピックを呼んだ男」として知られる日系二世の実業家和田勇氏は、幼少期を御坊市で過ごし、のちに南加県人会会長に就任しました。今回の交流では南加県人会の紹介から始まり、本校英語部員全員で御坊市や日高高校の紹介プレゼンテーションを行いました。南加県人会の参加者からは発表の内容に賞賛の声が上がりました。その後、質疑応答など自由な会話のやりとりに移りましたが、双方からの質問が途切れることなく、ユーモアのあるやりとりで笑いが絶えず、予定時間を大幅に超過するほど非常に盛り上がりました。ほんのひとときの交流で小さな一歩かもしれませんが、県人会との交流の活性化に一步踏み出すことができました。**同じ故郷を持つ「和歌山県人」として、次世代の間でさらにネットワークが広がっていく期待が高まりました。**



東京の大正大学生が地域創生のため御坊市に滞在

10月14、15日、東京の大正大学地域創生学部2、3年生が2年総探の授業に来て下さいました。大正大学生は御坊市を拠点に、日高地方の市町村でフィールドワークを行い、地域づくりについて研究を行うために、約1ヶ月滞在していました。滞在中は御坊祭りの見学や地域の様々な団体との交流や各所で調査を行い、最終週には御坊市で研究の中間発表もされていました。

この時期、本校普通科2年生は翌週のフィールドワークに向けて、インタビューや調査の準備をしていて、それぞれのグループが自分の研究テーマに関する仮説を検証していく段階でした。そのため、大正大学生とは関心事を共有しており、授業の中でお互いの研究テーマや調査方法について情報交換することが主な目的で、このような交流が実現しました。最初はお互いに遠慮がちに話し始めていましたが、そのうち雑談も交えながら、談笑している姿が見られました。若者同士はすぐに打ち解け合い、探究についても情報交換できた様子でした。

御坊市には大学がなく、普段大学生と出会う機会はありません。その上、大正大学は東京の巣鴨にあり、和歌山県で暮らす私たちとは生活感覚がずいぶん違うと考えられます。地域課題の解決策を考えている生徒たちにとっては、**大学生、都会に暮らす若者という新しい視点を得られる貴重な経験**となりました。大正大学生にとっても、現代の高校生が真剣に地域課題について考えていることに刺激を受ける機会となったそうです。来年の10月にも再び来校していただきたいものです。

